

# SUBURBIA SUITE; COSMIC LANDSCAPE SPECIAL



ROSSANA PODESTA

『黄金の七人』シリーズのジョルジアに尽きる。『レインボー作戦』では、コスチュームに合わせて取り替えるコンタクトがカラフル。部屋の中で意味もなく薄着で歩いてる、グラマラスな身体にポプ・ヘアーがよく似合う。



MONICA VITTI

輝くようなプラチナ・ブロンドの髪に羽織るショールがゴージャス。「女房の殺し方教えます」で演じたモンロー・タイプの可愛い悪妻がいい。澄ました顔の美女って感じだけど、ときおり見せる笑顔にやっぱりドキッとさせられる。

アントニーニ映画での彼女はこの際忘れてもいい。「結婚大追跡」みたいなB級アクション。「唇からナイフ」の美人スパイ、モデスティ。スタイリッシュなファッションとサソリの刺青がセクシーで、ソバカスまでキュートに見える。

VIRNA LISI

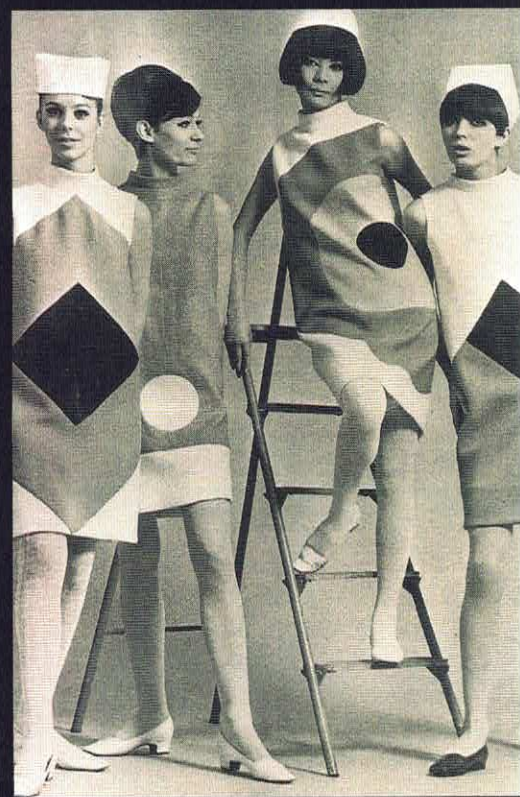


SHIPS LTD.

*Go! Go!  
Italian Girls*



# future anti-iques



アメリカのサーベイヤー1号が月面軟着陸に成功したのは1966年。ピエール・カルダンはコスモコール・ルックを発表する。開拓者的なクチュリエの、制限のない想像力が創り出すモード。プラスチック、ヴィニール、ポリエステル…… 人工素材から生まれる希望にあふれた未来を告げる軽やかで大胆なフォルム。

イヴ・サンローランのモンドリアン・ミニ、弾けるような若々しい美しさ。初めて黒人モデルを起用したアンドレ・クレージュは、アクティヴなメタリック・ミニドレス。『バーバレー』の衣装デザインを担当したバコ・ラバンヌのスポーティーなセクシーさ。デザイン、カット・ワーク、モデル、フォトグラフ…… '60年代後半のモードは、すでにコンテンポラリー・アートとして存在しているといってもいい。

「クリエイションがすべてなんだ」これはカルダンの言葉。アポロ11号で人類が初めて月面に着陸したのは1969年の夏のこと。そのときモードの冒険者たちの眼には何が映っていたのだろう。

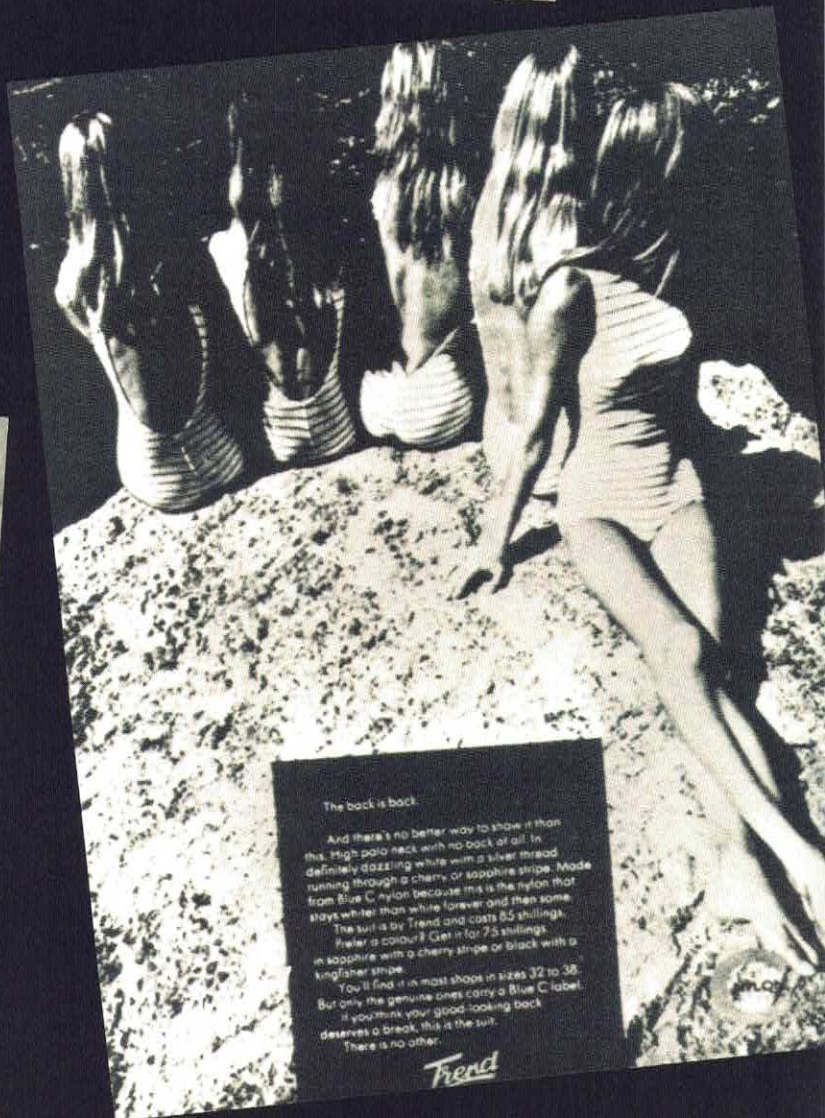
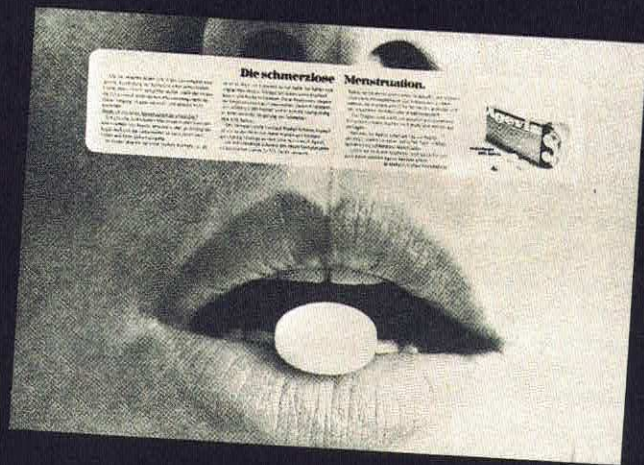
# LOOK!

雑誌をパラパラとめくっていると、時々とても惹かれるページに出会うことがある。それがどうしてもなくカッコいいデザインだったら、たとえ広告のページだってかまわない。さっそく破いて部屋の壁にはってしまってもいいと思う。

'60年代の広告デザインは、特にそんなカッコよくて部屋に置きたくなるような作品が多くて目が離せない。完璧に近いバランスの気持ちよさは、疾走するドライブの感じと似ている。作品から発せられるスピード感のせいかもしれない。まるでシャッターの音と一緒に、スタジオに流れていたBGMまでプリントされてしまったかのような、瞬間のリズムを感じる。

目に触れるものすべてを美しく構成していく。そんな才能にあふれたグラフィック・デザイナーやフォトグラファーたち。ヒップな写真を巧みに、そして大胆にデザインに組み入れるエドウィン・ブリグデイル。自刷技術を駆使するフランコ・グリニャーニのクールでカッコよくて少しスリリングな、モノクロとカラーがコーディネートされたデザイン。興味のある人は、ぜひ探してみるといいと思う。

さてと、さっそくこのページを拡大コピーしてお部屋にどうぞ。



ハンフリー・ボガートが私立探偵を演じた「マルタの鷹」「三つ数えろ」ハリウッド全盛期に作られたハードボイルドの傑作だが、もしこれらの探偵映画にジャズが使われていたら、と夢想してしまうのは僕だけだろうか。探偵映画にジャズが定着するのはそれから30年ほど経った70年代になってから。ここではその代表作3本を紹介していこう。

まず'73年、ボギーが演じたイメージを覆すようなフィリップ・マーロウ像を作り上げたロバート・アルトマン監督作品「ロング・グッドバイ」。夜の世界が夢のように柔らかなヴィルモス・シングムンドの映像のバックに流れるスコアは、ジョン・ウィリアムズが担当。デイヴ・グルーシン率いるピアノ・トリオ、トランペットにストリングス、ヴォーカル、あるいはスパニッシュ・ギターをメインに、と様々なヴァリエーションでテーマ・メロディーが演奏される。彼の一端を示すオーセンティックなジャズが、この映画の気意い雰囲気をよく表していた。

翌'74年にはロマン・ポランスキー監督の「チャイナタウン」が公開される。こちらはロバート・タウンのオリジナル脚本ながら、レイモンド・チャンドラーが小説で描いた世界をそのままスクリーンに再現。'40年代に制作されたハードボイルド映画への限りないオマージュが込められた一篇だった。舞台となった'30年代に流行した曲を散りばめ、映画にエレガントな格式を与えていたオリジナル・スコアはジェリー・ゴールドスミス。「愛のテーマ」のトランペットのせつない音色は、主人公たちの運命を暗示しているかのようだった。

そして'75年、チャンドラー原作のマーロウもの「さらば愛しき女よ」が登場する。「ロング・グッドバイ」がコミック雑誌、「チャイナタウン」が文芸作品なら、この「さらば愛しき女よ」はパルプ雑誌。地味だが存在感のある「スリーピング・アイ」ロバート・ミッチャム。ローレン・バコールを彷彿させるクールなシャーロット・ランプリング。デイヴィッド・シャイアのベンによる音楽が、このふたりをノスタルジック・ムードで彩る。ロニー・ラング、ディック・ナッシュといったジャズ映画には欠かせないミュージシャンを配しているのもうれしい。これらの音楽を聴いていると、やはりハードボイルドにはジャズが似合うと思わずにいられない。ボギーが生きていたらどう思ったのだろうか。



# PASSION

## Neal Hefti

'50年代にカウント・ベイシー楽団で活躍した、世界で一番スマートな編曲者のニール・ヘフティ。ジャズ・スコアのイメージが強いけど、名曲もたくさん書いて「ガール・トーク」「リル・ダーリン」など、どれも可愛いタイトルばかり。そういえば「キュート」っていうのもあったっけ。で、それもそうなんだけど、彼の魅力はそれだけじゃないっていうお話。リチャード・クワインやジン・サクスに代表される'60年代の都会派コメディーは、ニール・サイモンの悲しくて可笑しいストーリーとジャック・レモンの困った顔、そしてヘフティの音楽が必需品。ちょっととぼけていてコミカルで、だけどどこかやるせないメロディー。ゴードン・ダグラス監督の『ハーロー』のテーマなんて、そんなヘフティ・スタイルの魅力がいっぱい。『砦の29人』のシンプルで力強いスコアなんかはちょっと異色な感じがするけど、知らない人はいないって感じのあの『バットマン』のテーマを作った人と思えば、それもうなずけるよね。

## Dave Grusin

『卒業』=サイモン&ガーファンクルっていう印象があまりにも強いから、音楽をサポートしていたのがデイヴ・グルーシンだってこと、ちょっと知られてないかもしれない。エヴァ・オーリン主演のあのサイケ・カルト・ムービー『キャンディ』だって主題歌はバースだったけど、音楽担当はグルーシンだったし。っていう感じでポップス系の映画音楽からスタートした彼だけど、もちろん本来はジャズの人。『レーサー』のマイルドなボサノヴァや『愛すれど心さびしく』のリリカルなメロディーが彼の一番の魅力なんだと思う。ニュー・シネマ特有の“若さゆえの弱さ”をふっと包みこむ感じっていうのかな。『コンドル』から始まるシドニー・ポラック監督とのコンビも、都会的なサウンドに柔らかいリベラルな雰囲気があって、とても彼らしいなって思ってしまう。

## Burt Bacharach

バート・バカラックという名前を聞いただけで、もう喋りたいことが山ほどあって大変っていう人は、以下しばらく我慢して下さいね。『何かいいことないか仔猫ちゃん』『紳士泥棒/大ゴールデン作戦』『007カジノ・ロワイヤル』。どれも怒る気がなくなっちゃうくらいバカ



# REPORT

バカしくてスピーディーでキュートでキンキーな映画。それにバカラックのゴージャスでヒップでユーモアにあふれていて、そのくせ信じられないくらい美しいメロディーがくっついてるなんて許されていいのでしょうか。でもほんと、ジョークが効いててもっとどどんやっしてほしいな。なのに最近のバカラックはスターの後ろで澄ました顔してピアノなんか弾いちゃってるんだもの。もっと素敵なおふざけを期待してるのにね。みなさんはどう思います？ WHAT'S NEW, BACHARACH!

## Kenyon Hopkins

フィル・ウッズやジミー・クリーブランドを起用したクールなジャズをバックに、ギャンブラーの姿をサスペンスたっぷりに描いた『ハスラー』。スコアを書いたのはケニオン・ホプキンス。モノクロ・スタンダードのスクリーンの向こう側から響いてくるようなサウンド。それがホプキンスの

持ち味で『ハスラー』はそのベスト・スコアなんじゃないかな。だからって彼はそれだけの人ってわけじゃない。ハリウッド・デビューとなった『ベビー・ドール』、ラロ・シフリンがピアノで参加した『誘拐犯を逃すな』、オーケストラをメインにジャジーな曲が顔をのぞかせる『LILITH』、オルガンとヴァイブでスマートに仕上げた『MISTER BUDDWING』。そして『雨のニューオリンズ』の素晴らしき！若くして映画界を離れてしまったホプキンスだけど、彼のサウンドの強い輝きはきっと永遠にハリウッドに記憶されるんだろうな。

## John Williams

スピルバーグ作品やポストン・ポップスの常任指揮者として、今ではすっかりメジャー・ネームのジョン・ウィリアムズ。『おしゃれ泥棒』『美人泥棒』『哀愁の花びら』『俺の女に手を出すな』とソフィスティケイテッド・コメディーを得意とした、'60年代のカラフルでちょっと知的なサウンドも忘れちゃいけません。「マンシーニにそっくり」なんて言っちゃえばそれまでだけど、これって最高級の誉め言葉だと思う。ジャズ色を強めた『ロング・グッドバイ』やトゥーツ・シールマンズのハーモニカがブルージーな『シンデレラ・リパティエー』なんかも、最近のシンフォニック・スコアとは違うけど、とても彼らしい。『アイガー・サンクション』のクール・タッチなんて、ジャズ好きのクリント・イーストウッド監督を大喜びさせたに違いないって思う。いろいろなスタイルがそれぞれに評

# ROSC

画されている、とてもマエストロっぽいところがウィリアムズの特徴なのかもしれませんね。

## Johnny Mandel

エルマー・バーンステインの『黄金の腕』に続けとばかりにトップ・クラスのウエスト・コースターが起用された『私は死にたくない』。ジェリー・マリガン、シェリー・マンらの持ち味が十分に発揮されたモダン・ジャズになっていたのは、スコアを手掛けたジョニー・マンデルがバイシー楽団などでトロンボーン奏者として活躍した経歴の持ち主だったからかも。マンシーニを彷彿させる『卑怯者の勲章』も、『SHADOW OF YOUR SMILE』でソングライターとしての才能も見せた『いそしぎ』も、スリリングなドライブ感が魅力の『動く標的』も、そんな経験が生かされているのでしょう。ちょっと異色なのが戦争ブラック・コメディの傑作『マッシュ』のサントラ盤。台詞やラジオ・ノイズがコラージュされたコンセプチュアル・アート。でもこの編集アイデアはロバート・アルトマンなのかな？ それにしても『SUICIDE IS PAINLESS』。これってやっぱり名曲！

## Lalo Schifrin

『スパイ大作戦』といえば、もちろんラロ・シフリン！ TVに映画に大活躍って感じの彼の音楽は、魅惑的なメロディーとドライブの効いたリズムの連続。サスペンスやアクションが大好きなアメリカ人が、そんな彼を放っておくはずがないですね。エキゾチックな色彩のオーケストレーションも魅力的だし、シフリンがブエノスアイレス出身のユダヤ系アルゼンチン人だからってわけじゃないだろうけど、彼くらいヴァイタリティーにあふれていて、そのうえカッコいい曲を書く人って珍しいんじゃないかな。『シンシナテ

イ・キッド』だって『殺しのエージェント』だって『ブリット』だって、シフリンの音楽がなかったら、きっとあれほどドキドキすることはなかったでしょう。『危険がいっぱい』のテーマ曲『ザ・キャット』のジミー・スミスのオルガンだって、シフリンのビッグ・ブラスがあったから、今にも踊りだしたくなるほどスリリングに輝いていた、といっても嘘にならないと思う。



## Andre Previn

ジャズ界からクラシック界まで知らない人はいない天才ピアニスト。『ワン・トゥ・スリー』『あなただけ今晚は』、ビリー・ワイルダー作品を観るとでてくるドリーミーでソフィスティケートされたサウンドが彼の持ち味。ジャック・ケルアック原作のビート・ジェネレーション作品『地下街の住人』の音楽監督なんかもやっていて、ジェリー・マリガン、アート・ペッパー、カーメン・マクレエなんてスターの贅沢な競演で楽しませてくれる。

ロジェ・ヴァディム=ジューン・フ SFカルト・ムーヴィー『バーバレー シェイションのさわやかなコーラス い『さよならコロンバス』。ポップなメントで描きだすノスタルジックは、彼ならではのエヴァー・グリー

Charles

# RENT



## Marvin Hamlisch

『泳ぐひと』でハリウッド・デビューを飾ったブロードウェイ出身のヒット・ポップス作曲家。バカラックの主題曲も美しい『幸せはパリで』、ウディ・アレンのスラップスティック・コメディ『バナナ』に展開されるチャーミングなメロディー!

## Vic Mizzy

『わんぱくフリッパー』など多くのTV音楽を担当したハッピー・アメリカの象徴って感じの作曲家。『ゴールデン・ブル作戦』のにぎやかなジャズ・サウンド。『サンタモニカの週末』のまぶしいほどのポップ・スコア。その他愛さがたまらない魅力。

## Frank DeVol

ドリス・デイ主演の『夜を楽しく』『おしゃれスパイ・危機連発』といったコメディから、西部劇『マクリントック』まで、軽妙なタッチのジャズ・スコアなら彼におまかせ。なかでもロバート・オールドリッチ作品の歯切れよいドライなサウンドが断然イカしてる。

## Fred Karlin

A&Mタイプのソフト・ポップスならお手のもの。『下り階段をのぼれ』『合併結婚』『くちづけ』といった作品で、オルガン・ジャズからマーチ、ボサノヴァまで幅広く聴かせてくれるが、そのセンシティブな響きは変わらない。

フォンドの  
ラ。アソ  
スも印象深  
なアレンジ  
クな未来”  
ンの輝き。

Fox

# The Silencer Girls



CAMILLA SPARV

にっこり笑ってふいと無視してくれる彼女は、いつもお金持ちのお嬢さん。現金作戦、マクゲンナの黄金、情報局R。すべていい。



ELKE SOMMER

何でっかって、キスは殺しのサイン。(ト) 知る人ぞ知る日級グラマラーの名花、『暗闇でドッキリ』もコミカルでゴケティンゴ。



SENTA BERGER

レッド・フラウンのロング・ヘアがセクシー。紅一点の出演が光る、気難し屋ベキンバーに二度も起用された嬉しい(?) 謎の持ち主。

蓄音機は犬のニッパが目を傾けているRCA-VICTORのレコード・マーキングのサインを見るたびにスリー・サンズのレコードが聴きたくなる。スリー・サンズはアコーディオン、ハモンド、ギターのムード楽団。彼らの音楽からイメージされるのは、古きよきアメリカのリビング・ルームの香り。子供たちが走りまわり、テレビからは『パパは何でも知っている』が流れている、そんな風景。もし『ぼくの伯父さんの休暇』がアメリカで撮られていたなら、テーマ音楽は間違いなくスリー・サンズだったに違いない、なんて思ってしまうほど蓄音機と犬と子供たちが似合う音楽だ。部屋でひとり静かに聴くならトリオ盤を、ストリングスものならふたりで、パイプ・オルガンとの共演盤はみんなで騒ぐパーティーに。ヴァイブやセレスタを加えたものまであるのもうれしい。

スリー・サンズをちょっとスノップにした感じなのがアート・ヴァン・ダム・クインテット。ホテルのラウンジ・バンド出身だけあってアルバム・タイトルにカクテルっぽいものが多く、そのくすぐったいようなお洒落感覚が楽しい。スマートなヴァイブにとぼけたアコーディオンが絡むと、ちょっと気どったフレンチ・コメディのワン・シーンを彷彿させる。ぜひ一度お試しあれ。

## Listen to the quiet

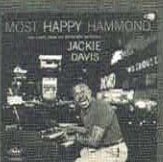
最近のちょっとした発見。金曜日の夜、チャンネルは「3」。テレビのスイッチを入れる。オープニング、カメラはパリの街を上空からなめるように捉え、地上へ降り道に沿ってゆるやかにパンしていく。バックに流れるのはオルガン、ヴァイブ、フルートのアンサンブル。パリのどあるカフェで、ティー・カップで指を暖めながら街ゆく人を眺めている…… そんな気分にかけてくれるサウンド。実は『フランス語会話』のテーマ。なかなかのヒットだと思ったんだけど、これってもうみんな知ってるのかな？

冬の午後のパリが、テレビから聞こえてきたサウンドのイメージだとしたら、夜は？ エディ・バークレイ楽団なんか、ナイトクラブ気分がぴったりなんじゃないかなって思う。エディ・バークレイといえば、パリの名門レーベル、バークレイのオーナーだった人。彼の率いるオーケストラの演奏が素晴らしいスイート・スウィング・サウンドで、ブルー・スターズとの共演！なんて素敵なことまでやってくれちゃう。さらに最高なのがクインシー・ジョーンズのアレンジによる作品群。流れるようなストリングスに軽快なミュート・ブラス、ソフト・パーカッションに暖かいコーラスの組み合わせは、このために小粋なお洒落という言葉があるんじゃないかと思えちゃうほど。クインシーが後にハリウッドで「ニュー・マンシーニ」のニック・ネームをもらったのもうなずけてしまう。バークレイとルグランの共作曲なんてほとんど聴くたびにときめいてしまうから、夜になるのを待って、レコードに針を落としてみてはいかがですか？

## Quiet groove

ハモンド・オルガンっていうと、ついファンギーなジャズを想像してしまうけど、たまにはイージー・リスニングなんてどうでしょう。クラブのさわめきよりも、部屋でお茶でも飲みながらっていうのが似合いそう。イージー・リスニングっていうくらいだから、本当に誰でも気軽に楽しめる音楽。パティ・コールのように有名な人たちから、誰も知らないんじゃないかっていうような人たちまで、昔はこういうレコードがそれこそ星の数ほどあったみたい。悪くいえば濫造気味。でもそれはとてもポピュラーだったことの証明。ジャジーなものからポップスっぽいものど内容はヴァラエティーに富んでいるけど、誰もが知っているハリウッドやブロードウェイのスタンダードが気持ちよく演奏されているから、オルガン・フリークじゃなくてもさっと気に入るはず。冬の短い一日、外は寒いから部屋でゆっくり、なんてときにこんなレコードをかけてたら、ますます何もする気がなくなっちゃうかもね。

そして特別な一日、クリスマス恋人とふたりきり静かにすごしたいなら、パイプ・オルガンのクリスマス・アルバムを、音もなく降る白い雪をほんやりと眺めながら、こんなレコードを聴くクリスマスも、みんなで騒ぐパーティーに負けないくらい素敵なもの。どちらを選ぶかは難しいけどね。



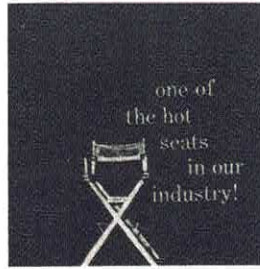
# The Beautiful Individualists



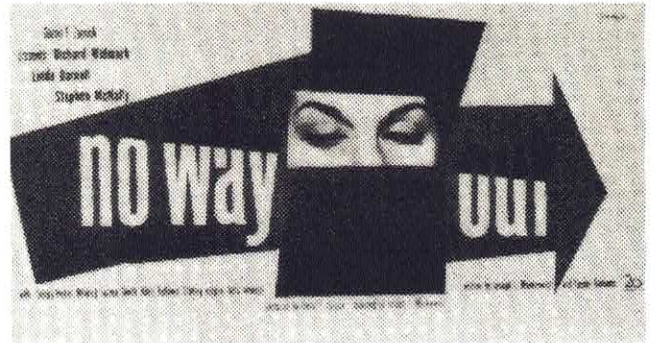
## EL PRODUCTO



'50~'60年代のアメリカ映画の、ストーリーよりも印象に残ってしまうほど軽快で洒落ているタイトル・デザイン、そのたいていのはソール・バスによるもの。「80日間世界一周」のエンディングの約6分間にわたるクレジット・タイトルのアニメーションなんて、まるで一本の短編映画といってもいいくらい。この映画の予告編も言葉でいえないくらいカッコいいんだけど、これもソール・バスのものかな？「七年目の浮気」のリズムとグラフィックが同時に進行するようなハイ・テンポのタイトルも本編以上に魅力的。



タイトル・デザインといえば『パリの恋人』。とてもきれいで可愛いリチャード・アヴェドンの写真が次々にあられ、ちょっとしたファッション雑誌をバラバラとめくっている気分。雑誌の上にレイアウトされたその時代のモードだけが持つ雰囲気、指先や眼差しのトリミングが、アヴェドンの写真をよりチャーミングにみせる。その魅力が何だかアヴェドンに撮られる女性たちだけに与えられる特権みたいに思ってしまうのは、フ



2nd NEW YORK FILM FESTIVAL  
Sept. 14-26 1964 - Philharmonic Hall  
Lincoln Center.



アッション雑誌をめくってはため息をつく女の子の気持ち特有のものなのかしら？

ソール・バス、リチャード・アヴェドンに惹かれる人なら、ポール・ランドのグラフィック・デザインにもピンとくるでしょう。まさに「サエてる」という感じのものばかり。白と黒のコントラストのきいた映画ポスターは、「観客層に対して洗練されすぎている」(1)という理由で使われなかったというエピソードもあるくらいだから、ランド

のデザインはセンセシヨナルなできごとだったに違いありません。だからこそ、今みても新しく、シャープで、スマートで…… きっと、私たちが惹きつけるものは、今だって昔だって変わらないのでしょうか。

# International Cafe Society



街にたどりつく。街路を歩く。目についたカフェに立ち寄ると、街頭にたたずむ一人、歩きだす二人、すれ違うたくさんの人たち。異邦の中でくつろぎを覚え始めて街に馴染がなじんできていく。そんな一連の接遇を街とかわしながら、カフェを渡り歩いていくのが、5年も続くのか、10年も続くのか。街角に見るものといえば、相も変わらず、遅れてくる男たちと置き去りにする女たちばかり。

アラン・タネール描く白い町のカフェで、左まわりの時計を見たとき以来、僕の心はときおり、見つかりそうで見つからずにいる“カフェ”を求めて漂ってしまう。それは、アポリネールささやくスタインのサロンであったり、ヴィアンがトランペットを吹いていたパリのクラブであり、ビートたちの朗読が続くダイナーだったりするのだが、そんな断片を繰り返し繰り返しかき集めてみても、次の街を、カフェを求めて出ていく時刻を待っていることに違はない。

雑踏にチャイをすするゴア、ナツメヤシの木陰に水煙草をふかすダマスカス、子供たちが道端でサッカーに興じるイスタンブール、コロセウムの下で陽射しを避けるようにイスの置かれていたアルル、ウィーンや香港、カイロと僕の足を止めさせた街は、必ずその一隅に、時を逆のぼる劇場-カフェを持っている。すべての街がそれぞれのカフェを秘めているというイメージこそ、僕を次の街へとかきたてるのかもしれない。

Editor-in-Chief ; Tōru Hashimoto  
Editor ; Chiharu Suzuki  
Designer ; Tomoko Imamura  
Writers ; Hisanori Ōkubo, Hiroaki Shimosaka,  
Chiharu Suzuki, Tōru Hashimoto



Suburbia Suite ; Cosmic Landscape Special 1991.11.25

203,3-5-7,Shimo-Ochiai Shinyuku-ku, Tokyo. Zip 167

Contact!

and introducing New Suburbia Squad ; Kazumi Udagawa, Takuya Harayama, Ayako Furusawa

**SNOW WAVE...?**



**SHIPS LTD.**